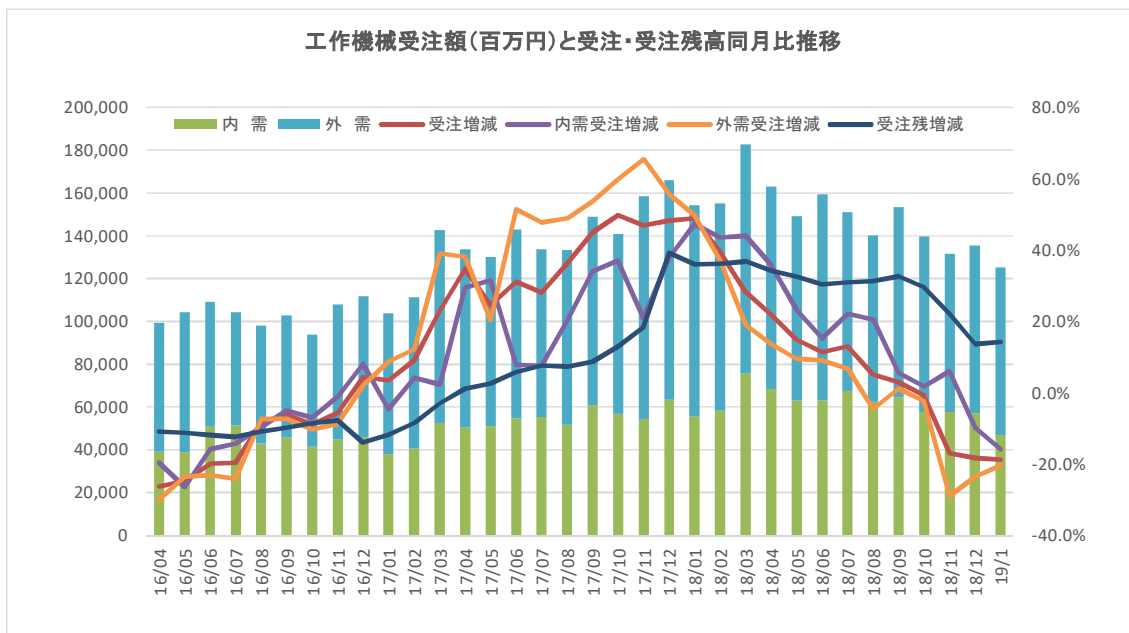


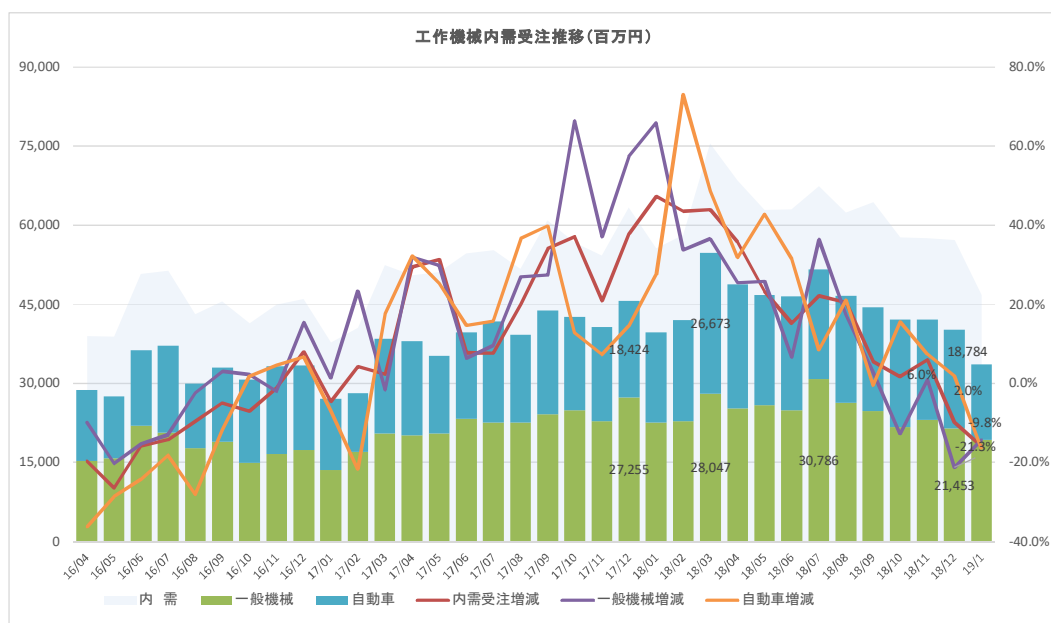
2019年工作機械業界動向（2/21調査）：2月ボトムも上期低迷続く

2019年1月受注額は18.8%減と4カ月連続減も依然受注残6か月保有

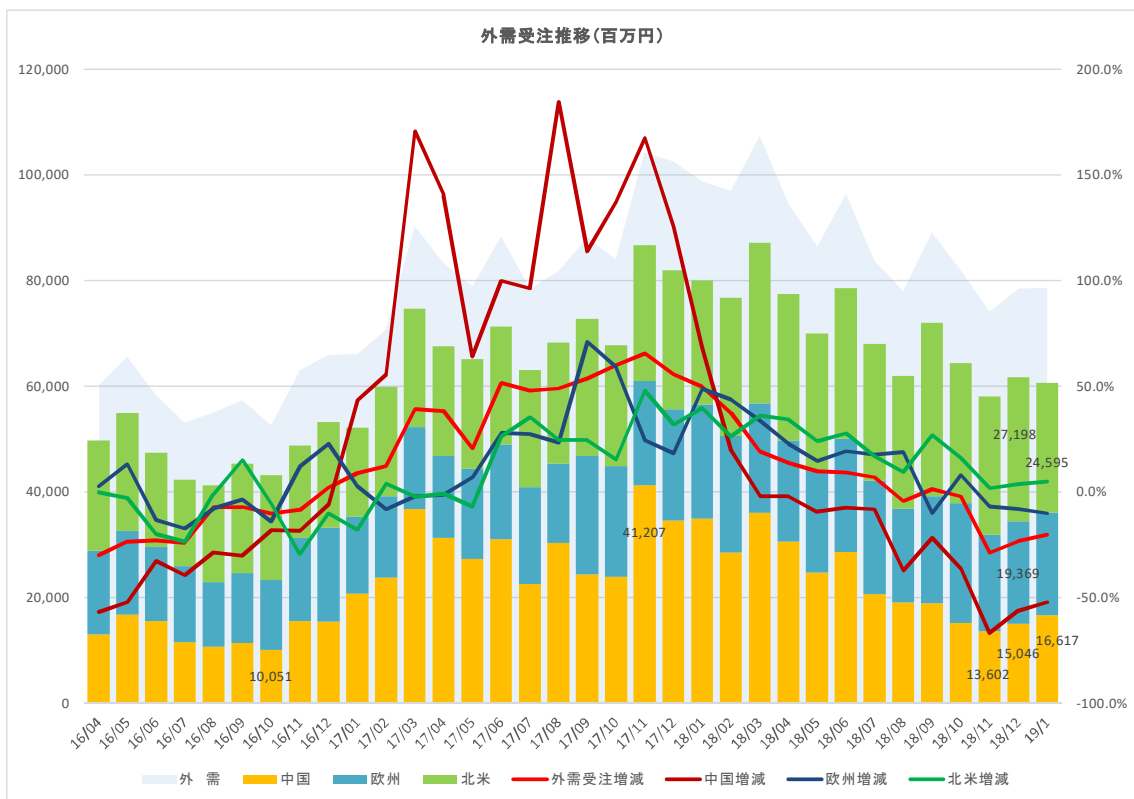
日本工作機械工業会が2/21に2019年の1月の受注額確報を発表した。1月の受注額は1254億円（18.8%減）と、4カ月連続の前年同月比割れとなった。国内外別では国内が15.9%減の468億円、外需が20.4%減の786億円に。20か月ぶりに1300億円を割り込んだものの、1月では18年に次ぐ過去2番目の額であり、1000億円超えは27カ月連続となる。



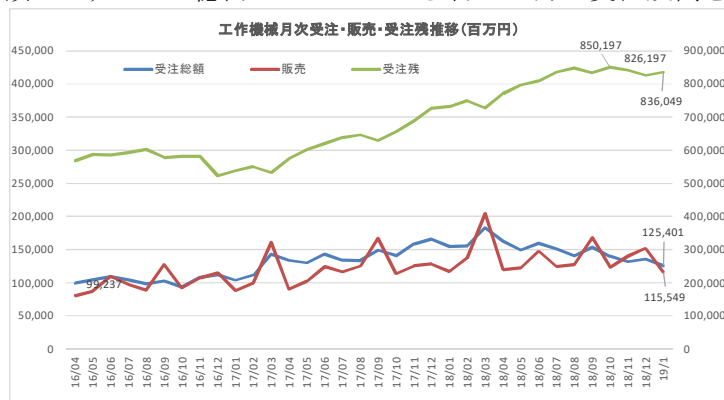
国内は23カ月ぶり500億円割れも1月としてリーマンショック後で18年に次ぐ数字。自動車向けが4カ月ぶりにマイナスが影響、但し自動車完成車向けは4カ月連続プラス、一方で自動車部品向けが23.4%減と厳しい。また電機精密が24.4%減と冷え込みが続く。



輸出は4か月連続前年同月比割れ、3か月連続800億円割れとなっているが、前月比では2か月連続増加している。中国が景気減速、11か月連続前年同月比減少で52.3%減ながら、2か月連続前月比増加し166億円の。欧州も3か月連続前年同月比減も2か月連続前月比増の194億円、北米は20か月連続前年同月比増の4.7%増、しかしアメリカが24か月ぶりに減少した。特筆すべきはインドで、55.1%増の59億円（スポット受注あり）となっている。なお、外需の業種別では主要4業種全てがマイナスで、特に電機精密は58.2%減と、国内同様の動きとなっている。

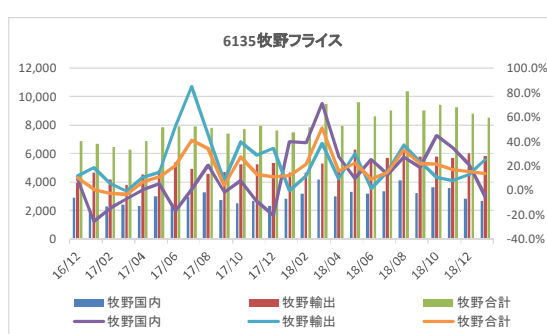
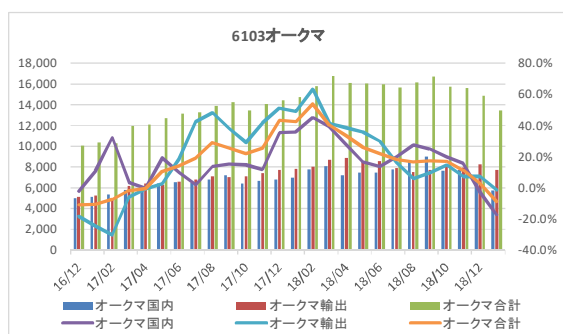
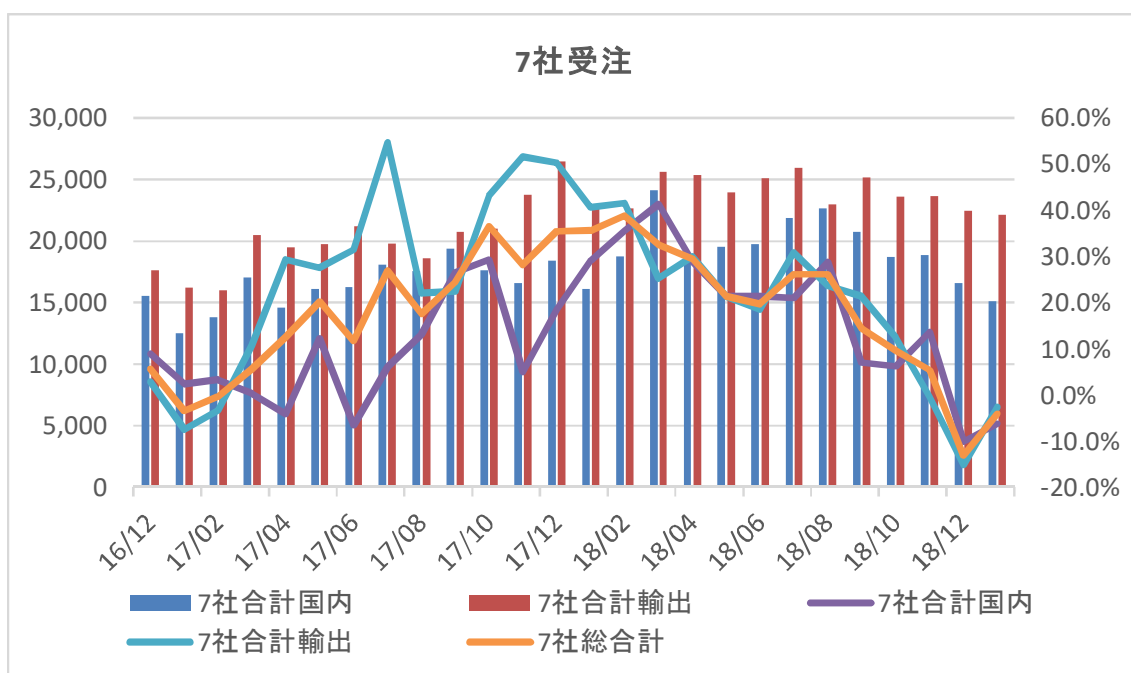


1月の工作機械販売は1.0%減の1155億円に止まり、受注高を下回ったことから、受注残高は前年同月比14.2%増の8360億円、前月比でも1.2%増となり、依然として高い受注残を抱えている。2018年の販売額が1兆6848億円だったことから約6か月の受注残高を抱えており、しかも今回はリーマンショック時のような大きなキャンセルの発生がないとのことで、工業会2019年受注予想1.6兆円を1000億円程度下回っても全体として受注残消化で販売額確保が可能な状況にある。



工作機械各社は豊富な受注残を維持するものの足元で機種構成や仕向け先で格差生ずる

日刊工業新聞で月次受注を公表している工作機械7社の推移で1月は前年同月比4.1%減の373億円となり、2カ月連続でマイナスとなった。個別ではオークマが国内向け17.3%減となり2017年4月以来の前年割れし、牧野フライスを除き7社中6社がマイナスに。唯一プラスだった牧野フライスは中国向けで自動車関連、北米で航空機向けが健闘した。またこの7社以外では機種で平面研削盤、芯なし研削盤、旋盤が高い伸びを続けており、岡本工作機械やミクロン精密、高松機械、滝沢鉄工所、浜井産業なども好調を継続している模様。

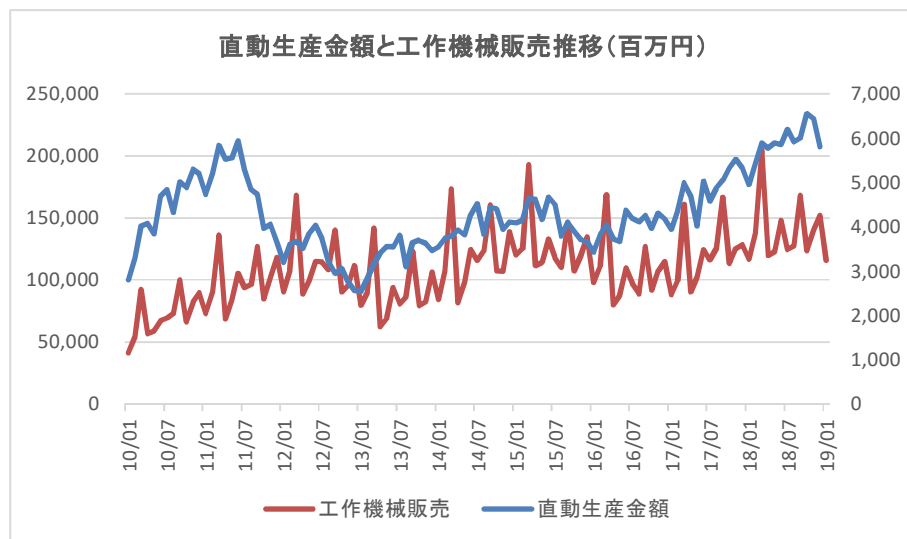


2019年は2月ボトムに上期低水準の受注続くも秋口に回復し2020年には再度受注拡大へ

当面、2月受注は中国での春節、国内も「ものづくり補助金」の第1回目申請締め切りが2/13など、受注手控える環境にあり、1月の受注を下回る懸念がある。しかし一方では米国、日本など製造業の人出不足が深刻で、自動化ニーズは衰えていない。さらに自動車産業では販売台数が伸び悩んでいるものの、環境対策、EV開発投資、自動運転などの案件が目白押しである。このため、2月ボトムに前年同月比較では2ケタ減が続く見通しながら、絶対額としては緩やかな増加に転じ、4~6月に更なる絶対額の落ち込む可能性は少ないと

判断する。また 3 月 1 日期日の米中関税問題について再度引上げ延長の方向が示される確率が高くなっており、加えて中国の景気刺激政策も加わる見通しにある。またここに来て延期が相次いでいた半導体メモリ投資について韓国 SK ハイニックスが投資拡大を表明、インテルも CPU 増産に向け設備拡大の方向を明らかにした。最大投資先のサムソンもメモリ以外では設備投資を緩めておらず、下期には半導体設備投資再拡大などで改めて受注拡大機運が高まってこよう。現状、工作機械工業会では 1 兆 6000 億円の受注予想ながら、上期の低迷が響き、

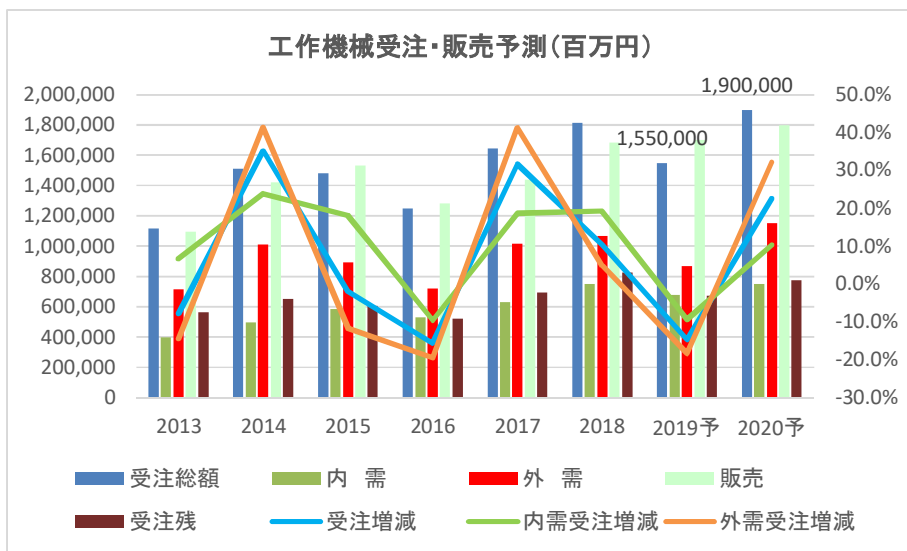
実際は 1 兆 5500 億円程度に減速する懸念もある。但し販売については通常より約 2500 億円近い受注残高が積み上がっている状況で、従来からボトルネックとして生産に



支障が出ていたボールネジや直線運動用軸受、さらにはサーボモータなどの供給も正常化する見通しで、受注残高消化により売上高の落ち込みは少ない模様。

続く 2020 年は改めて工作機械受注が大幅拡大する要素がある。まず世界的に次世代型のデータセンタ投資が活発化、5G

端末の本格発売など、半導体需要が再度急拡大し、半導体設備投資が再度ピーク更新する見通しにある。自動車も自動運転対応、EV 投資が控え、自動車関連の工作機械受



注拡大が見込める。このため、2020 年の工作機械受注は IoT ソリューションビジネスの拡大を含め 1 兆 9000 億円大台達成の動きも出てこよう。